

室町殿－足利将軍の見た庭園

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所 松永 修平

はじめに (表 1)

室町殿とは、「花の御所」とも呼ばれる室町幕府の足利将軍家の邸宅のことです。その歴史の始まりは、室町幕府 2 代将軍足利義詮が公家の室町季顕から邸宅「花亭」を譲り受け、別業^{べつぎょう} (別宅) を造営したことから始まります。義詮の死後は、院御所となりましたが永和3年 (1377) の火災により焼失します。翌年の永和4年 (1378) に3代将軍の足利義満が、院御所の跡地と同じくその火災によって焼失した南隣の菊亭の跡地を含んだ範囲に邸宅を造営します。義満はその後、応永6年 (1399) に北山殿に移り住み活動の拠点としましたが、以後も室町殿は義満の子の6代将軍義教、そして義教の子の8代将軍義政が邸宅として利用しました。最終的に義政の室町殿は、文明8年 (1476) の火災により焼失し、その後再建の動きはあったものの、達成されることはなく跡地は町屋へと変わっていくこととなります。

室町時代の庭園について

○庭園文化史上ひとつの黄金期

・天龍寺 曹源池庭園 ・足利義満の北山殿 ・足利義政の東山殿 ・本願寺蓮如上人の山科南殿庭園

・朝倉氏の一乗谷庭園群 など

○「寝殿造庭園」から「書院造庭園」へ

室町時代は「寝殿造庭園」から「書院造庭園」への過渡期となる時代です。室町時代末期に「初期書院造」が成立することに合わせて、「初期書院造庭園」もほぼ同時期に成立すると考えられています。

・室町幕府第6代将軍足利義教の室町殿

義教は、永享元年 (1429) に将軍職を引き継ぎ、永享3年 (1431) に室町殿を再建しました。この室町殿が、義満・義教・義政の室町殿のなかで最も整備されたものだと考えられます。長禄2年 (1458) に描かれた『室町殿御亭大饗指図』(図 17) からは、東西一町・南北一町半の敷地が西面する室町通側を「ハレ」とし、四脚門を設けていたことがわかります。邸宅の構成は、公家的典礼が行われていたことから平安時代の伝統を受け継ぐものでした。一方で相違点もあります。義教の室町殿では、寝殿を日常生活の場としておらず、「常御所」という別棟を寝殿の北側に建て、そこを日常生活の場としていました (図 18)。つまり、「ハレ」の場である寝殿南半部と南側の広庭は、公家的典礼のための空間とされ、公家の伝統を受け継いだものでしたが、「ケ」の面である寝殿北半では、使い方・構成が異なっていました。

義教の室町殿の庭園については、いくつかの史料から復元がなされており、庭園は寝殿・常御所・会所をそれぞれ中心とする建物群に対応する形で、3つの区域に分けられていたと考えられています。なかでも会所は、池に面して3棟が建てられており、社交や遊興のために用いられていました。

・8代将軍足利義政の室町殿

義政は、長禄3年 (1459) 父義教と同様に室町の地に邸宅を構えました。義政の室町殿には、表向施設として寝殿・公家座・殿上など、内向施設として観音殿・会所・持仏堂・泉殿西殿などが設けられていました。義政は、泉殿のために作庭を計画し、その工事に携わったのは善阿弥とされています。この泉殿や会所の庭園と、寝殿前面の南庭とは、その果たす役割が異なると考えられています。寝殿の庭園は、この庭園が公式行事の動線の中に組み込まれるのに対して、会所・泉殿の庭園は、室内利用のみで完結、つまり「観る」ための空間でした。

以上のように、義教・義政の室町殿は、一方では寝殿造庭園が造られると同時に、他方では鑑賞を主たる目的とした作庭が進められていたのです。

室町殿の範囲と空間構成

室町殿は、これまでの研究から「北小路 (現在の今出川通) 以北、今出川 (現在の烏丸通) 以西、室町以東、柳原 (現在の上立売通) 以南」にあったとされています。「室町殿」の名前も室町通に面して邸宅の正門が開いていたことに由来しています。これまで周辺では複数回の発掘調査が行われ、室町殿の四至や建物遺構、庭園遺構が確認されています。これらの調査から室町殿の推定範囲の北半部に建物空間、南半部に庭園空間が広がっていたことが明らかになっています。

既往の室町殿跡での発掘調査成果 (図 1)

室町殿跡では、これまで多数の発掘調査が行われてきました。以下で、溝 (堀) や塀などの区画施設と建物や庭園などの敷地内の調査をそれぞれ見ていきたいと思います。

○室町殿の四至を確認した調査

・調査 1 (1974) …室町時代の南北方向の溝を検出。(東限)

・調査7 (1989) …室町時代の東西方向の溝を2条検出。(南限)

・調査8-1 (2002) …東西方向の石敷き遺構を検出。(北限の築地堀か)

・調査9 (2018) …南北方向の堀を検出。(西限)

○室町殿跡の調査

・調査2 (1979) …室町時代後期の南に向かって下がる池を検出。

・調査5 (1985) …室町時代後期の景石4基や池の汀を検出。(図5)

・調査6 (1986) …室町時代の南に向かって下がる池を検出。後の立会調査で景石を3基検出。(図3)

・調査7 (1989) …室町時代後期の築山と景石2基を検出。(図5))

・調査8-2 (2002) …室町時代の建物2棟を検出。

今回の発掘調査成果 (図 13)

2020 年1月から4月まで室町殿の庭園空間と推定される敷地南東部で発掘調査を行いました。調査の結果、室町時代の庭園の一部が見つかりました。庭園は、池部と陸部で構成され、池部は南岸と東岸が見つかり「逆 L 字」型をしています。この岸は、8石の多色多様な景石で造られており、最大のもので大きさが約 2.75mにも及ぶものもあります。これらの景石は一連の石組みを構成し、特に6石は互いに接して、立体的に組み合わせられ滝石組を造り出していると考えられます。ただし、陸部では、遣水などの導水施設が存在しないことから、実際には水が流れない、いわゆる枯滝であったと考えられます。さらに景石を据える際には、拳大の礫を敷き詰めて石材を安定するように地業を行っていることも明らかになりました。また、今回の調査区の池部は、泥などの水性堆積が認められていないことから、景石群の位置まで水は及んでいなかったと考えられます。

また、庭園の造られた時期に関して、これまでの調査では詳細な時期は明らかにすることはできませんでした。今回の調査では、陸部の一部で断割調査を行った結果、造成土から 15 世紀中頃の土器が出土しました。室町殿は、3代将軍義満・6代将軍義教・8代将軍義政によって利用されたことが明らかとなっていますが、出土した土器の年代から、今回検出した庭園は、長禄2年 (1458) に室町殿を再建した8代将軍足利義政が造成したものと考えられます。

以上のように滝石組に用いられる石材規模・質感や色調への配慮、丁寧な造成工事が行われていることから、今回検出した庭園遺構は、室町殿の庭園の主要景観の一部であったと考えられます。

おわりに

16 世紀中頃に描かれたとされる『上杉本洛中洛外図屏風』に室町殿の姿を見ることができます。この室町殿は、東から見た図で、北側が建物の空間、南側が庭園の空間という状況はこれまでの調査成果とも合致します。ただし、この「洛中洛外図」に描かれる室町殿は、すでに存在しない在りし日の理想化・概念化された室町殿の情景を描いたものだという意見もあります。

今回の調査では、室町殿の庭園遺構を発見することができ、さらに、これまで明らかになっていなかった庭園の造成時期が足利義政による15世紀後半のものだと明らかにすることができました。このことにより、室町殿の庭園遺構の展開を考えるにあたって非常に重要な成果を得ることができました。足利義政が将軍に在位していた頃の室町時代は、応仁の乱が起こるなど、将軍の権力も安定していたとは言えません。それ故義政は政治的な側面では必ずしも評価が高くありませんが、文化的には東山文化の担い手としての評価は高い人物です。今回の調査で発見した庭園遺構からも義政の作庭にかける熱意を感じられるのではないのでしょうか。

参考文献

浅野二郎・仲 隆裕・藤井英二郎「初期書院造庭園に関する研究－その 1：初期書院造庭園と会所・泉殿の庭園」『千葉大園学報』第 41 号 75-83 頁 1988

川上貢『日本中世住宅の研究（新訂）』中央公論美術出版 2002

鈴木久男「発掘された室町将軍の庭」『室町時代の将軍の庭園』奈良文化財研究所紀要 2014

高橋康夫『海の京都：日本琉球都市史研究』京都大学学術出版会 2015

高橋康夫「室町時代の将軍御所と環境文化」『研究論集 18 中世庭園の研究－鎌倉・室町時代－』奈良文化財研究所学報 第 96 冊 2016

武居二郎・尼崎博正監修『造園史』京都造形芸術大学 1998

中村利則『町家の茶室』淡交社 1981

藤田盟児「中世住宅の空間構成の変遷」『研究論集 18 中世庭園の研究－鎌倉・室町時代－』奈良文化財研究所学報 第 96 冊 2016

表1 室町殿関連年表

年		将軍	出来事
貞治7年	1368	足利義詮	崇光院、室町幕府2代将軍足利義詮より寄進された院の御所に移る。
永和3年	1377		火災により焼失。
永和4年	1378	足利義満	3代将軍義満が隣接する菊亭の跡地を含む範囲に邸宅の造営を開始、室町殿に移徙(菊亭跡)。
永和5年	1379		義満、室町殿へ2度目の移徙(花亭跡)。
応永4年	1397		義満、室町殿から北山殿へ移徙。子の義持は三条坊門殿へ。
永享3年	1431	足利義教	義教、室町殿を再建し、移徙。
永享4年	1432		南向き会所造立。
永享5年	1433		北向き会所(会所泉殿)造立。
永享6年	1434		新造会所造立。
嘉吉元年	1441		義教、赤松教康により暗殺される(嘉吉の乱)。子である7代将軍義勝が室町殿を引き継ぐ。北小路(今出川)以北、今出川(烏丸)以西に、義教夫人の寺(のちの勝智院)造営
嘉吉3年	1443	足利義勝	義勝死去、室町殿解体。
文安2年	1445	足利義政	8代将軍義政、室町殿から寝殿などを烏丸殿に移す。
長祿3年	1459		義政室町殿跡地に新御所造立、移徙。
寛正2年	1461		室町殿の大改築を行う。長祿・寛正の大飢饉が起こる。
応仁元年	1467		応仁の乱勃発。室町殿に後花園上皇と後土御門天皇が移住。
文明8年	1476	足利義尚	義政の室町殿焼失。義政、小川殿(現在の宝鏡寺敷地)へ移る。
文明9年	1477		応仁の乱終息。
文明14年	1482		義政、東山山荘造営を開始。
文明17年	1485		「花の御所跡」に土一揆の衆が集結。
長享元年	1487		義政、室町殿の庭石や大松を東山殿へ運ばせる(『蔭涼軒日録』)。

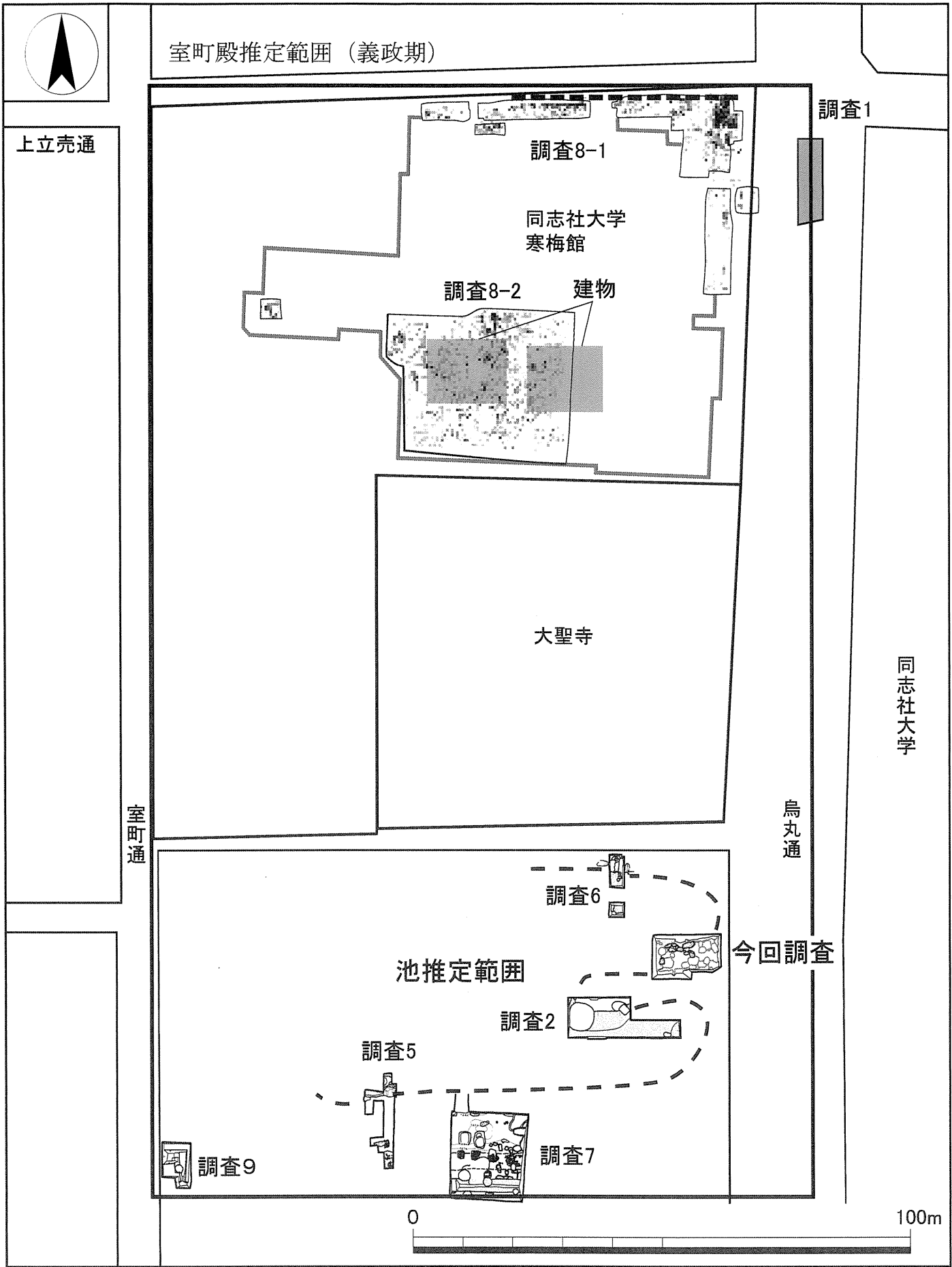


図1 周辺調査位置図(1:1000)

○既往の室町殿の庭園の調査

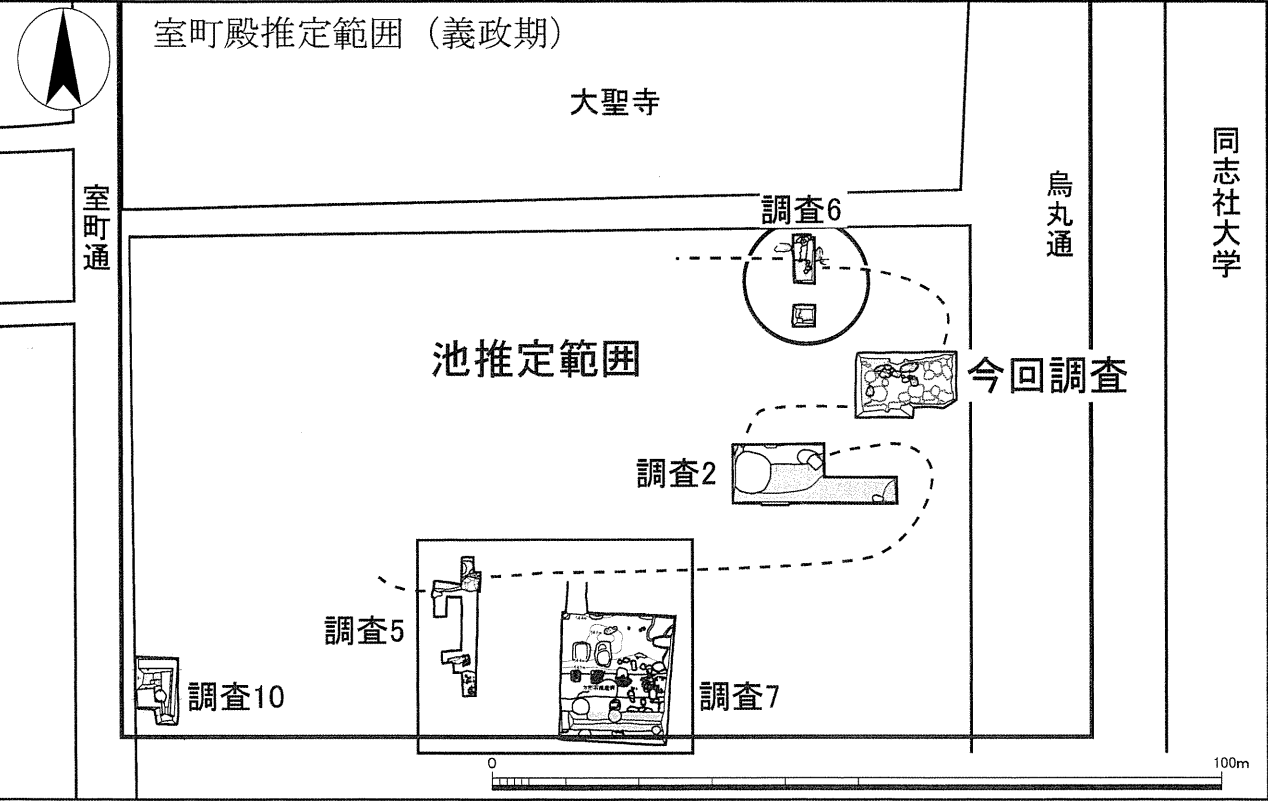


図2 室町殿庭園調査位置図 (1 : 1000)



図6 調査5調査区全景 (南東から)

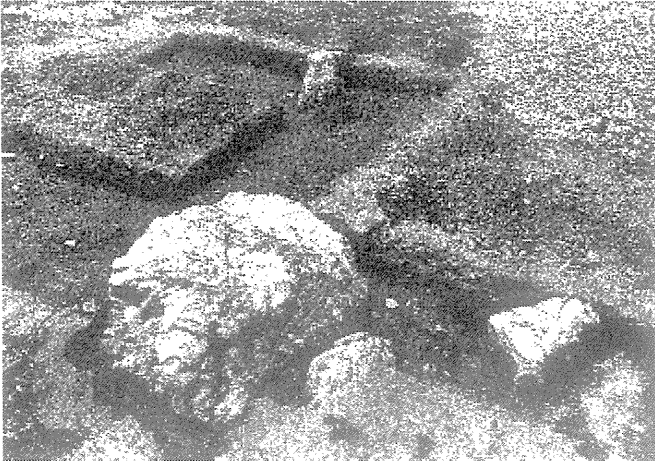


図7 調査5景石 (北東から)

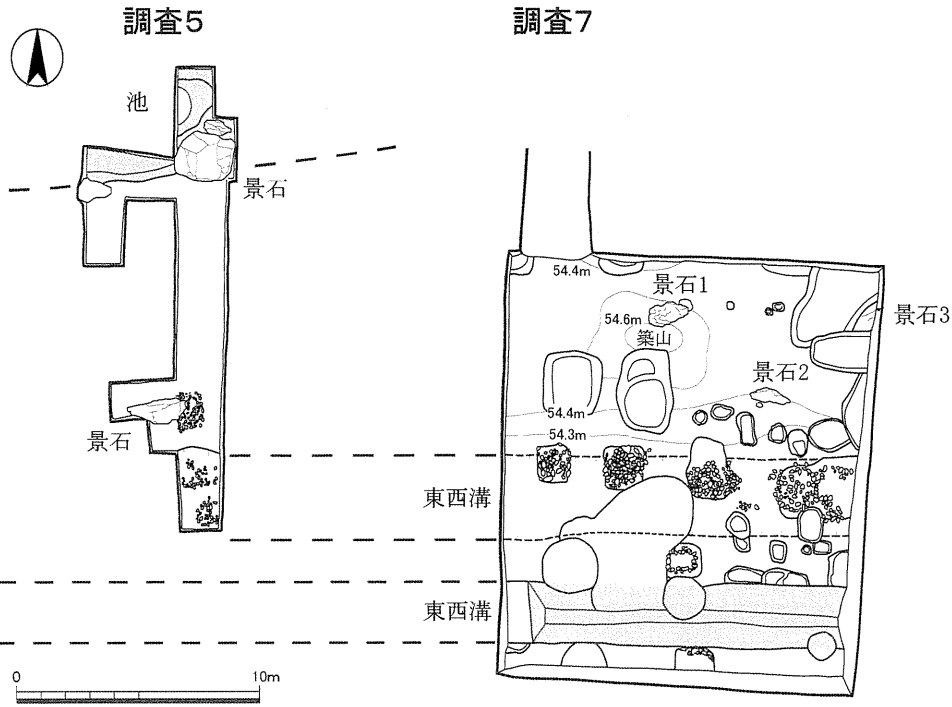


図5 調査5・7平面図 (1 : 300)

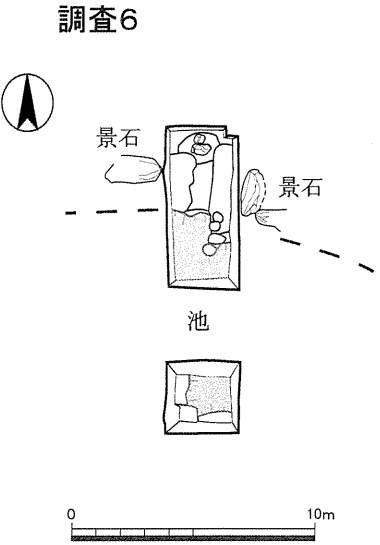


図3 調査6平面図 (1 : 300)



図4 調査6調査区 (北から)



図8 調査7調査区全景 (東から)

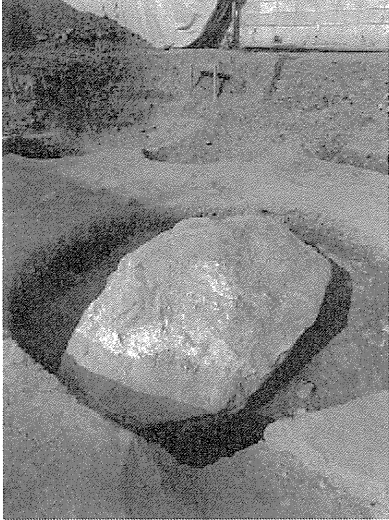


図9 調査7景石1 (南東から)



図10 調査7景石2 (南東から)



図11 調査7景石3 (東から)

今回の調査

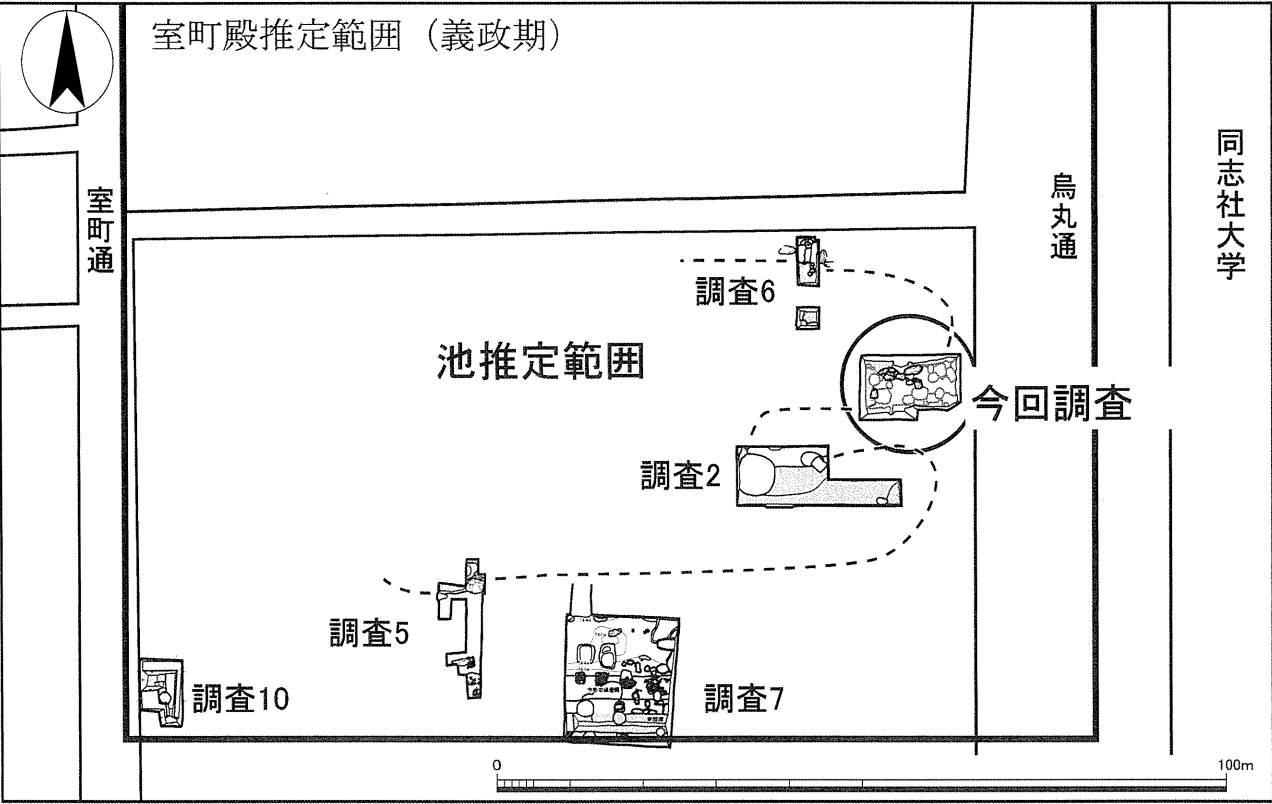


図12 調査位置図 (1 : 1000)



図14 今回の調査で検出した景石群 (北西から)

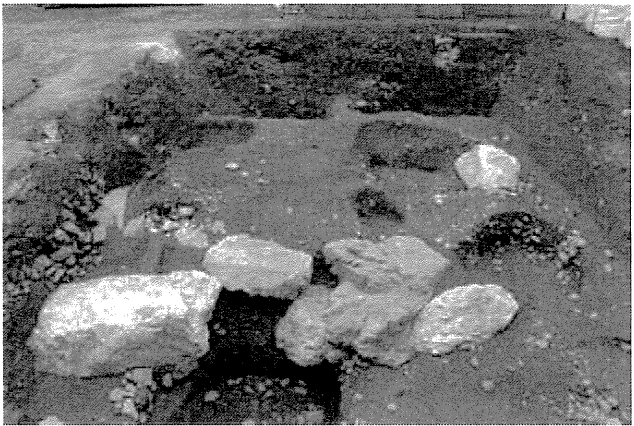


図15 今回の調査で検出した景石群 (北から)



図16 今回調査区全景 (西から)

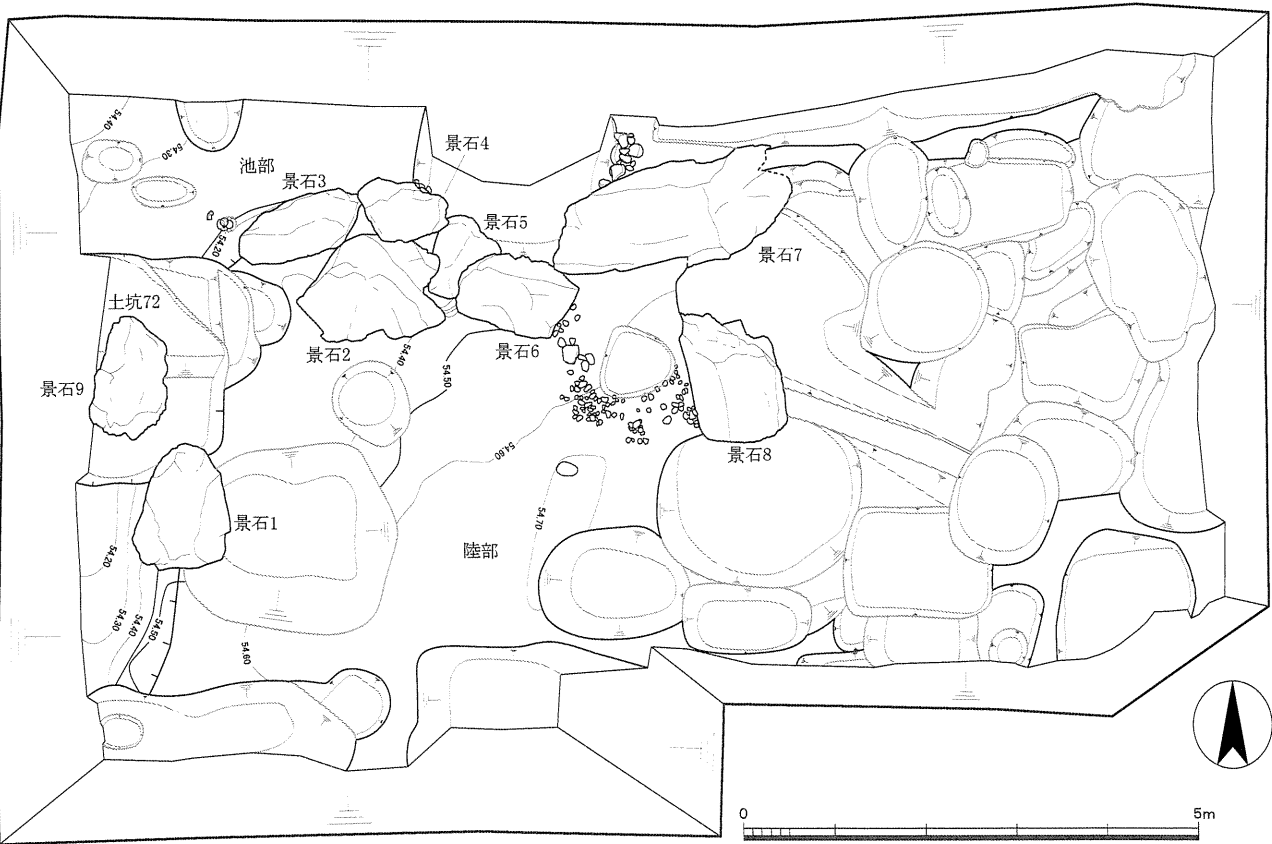


図13 今回調査遺構平面図(1:80)

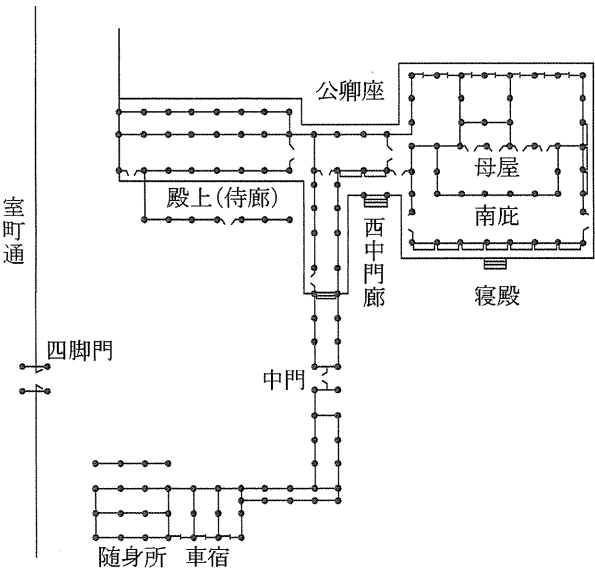


図17 『室町殿御亭大饗指図』より作成した
足利義教の室町殿の建築配置図

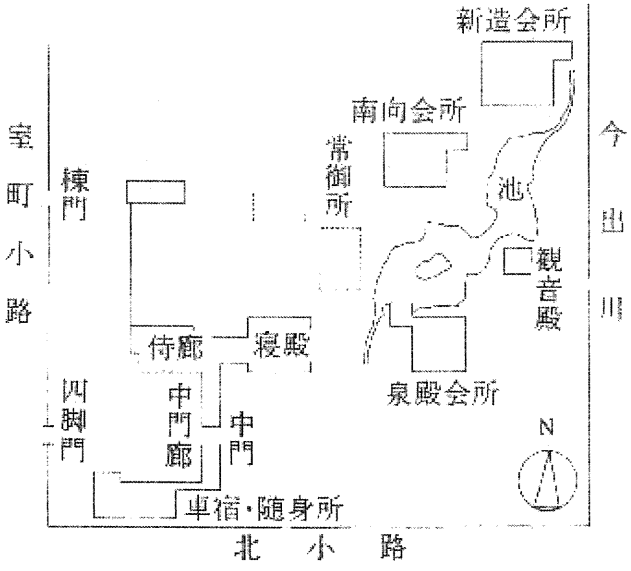


図18 義教期の室町殿推定復元案
中村利則『町家の茶室』より